

I. 神奈川県内 c. 海成・河成堆積物 (7) 宮田層化石床 露頭剥ぎ取り標本

標本番号 KPM-NP 24

標本名 宮田層化石床 露頭剥ぎ取り標本

大きさ 幅 3 m, 高さ 1.25 m

重量 58 kg

形状・展示・収納状況 やや厚い絨毯状、折りたたみ
大型移動棚に収蔵

採集地 神奈川県横須賀市津久井四丁目

緯度・経度 N35°11'57", E139°39'53"

標高 20 m

露頭の種別と現状 2007～2008 年急傾斜地対策工事に
より被覆、消失

露頭面の向き、傾斜 N88°W, 43-49°N (柴田ほか, 2014)

走向・傾斜 ほぼ水平 (柴田ほか, 2014)

堆積物の種別 砂礫層 (海成層)

年代 1.02～0.46 Ma (宮田層、蟹江ほか (2000))

採集作業 森山哲和 (考古造形研究所)

採集立会い者 樽 創

採集日 2008 年 2 月 6 日

関連文献等

青木廉二郎 (1925) 三浦半島の海岸に就きて. 地球,
3 (1), 101-111

堀越増興・小菅貞男 (1971) 横須賀市教育委員会特
別保護区, 津久井浜化石層の大型化石群集につ
いて (第一報). 横須賀市博物館研報, (17): 21-27.

蟹江康光・倉持卓司・岡田尚武 (2000) 横須賀市野
比海岸にみられる更新統宮田層の化石群集. 横須
賀市博研報 (自然), (47): 85-87.

柴田健一郎・倉持卓司・蟹江康光 (2014) 津久井化
石床のはぎ取り標本に基づく更新統宮田層の無
脊椎動物化石リスト. 横須賀市博研報 (自然),
(61): 31-34.

山口寿之・松島義章・平田大二・荒井章司・伊藤谷
生・村田明広・町田洋・新井房夫・高柳洋吉・尾
田太良・岡田尚武・北里洋 (1983) 三浦市下宮田
付近の初声層の宮田層の不整合. 神奈川自然誌資
料, (4): 87-93.

解説 人によっては、“宮田累層”とする人もいるが、
ここでは「宮田層」とする。宮田層は、青木 (1925)
の中で「宮田介層」と紹介されている。「宮田介層」
はその後「宮田層」とされていて、金田湾と小田和湾、
横須賀市長井の間を、繋いだように分布する。1971
年の横須賀市博物館研究報告 (自然科学) 17 号は「津
久井浜化石層調査特集号」とした特集号で、冒頭に、
横須賀市教育委員会の露頭と特別保護区化石層の写
真が掲載されている。宮田層の年代については、い
わゆる下末吉 (5e) 以前ということだけが分かって
おり、ナンノプランクトンを用いて山口ほか (1983)
は 1.22～0.44 Ma、蟹江ほか (2000) は 1.02～0.46
Ma としている。貝化石は、堀越・小菅 (1971) など、
多くの論文で紹介されているが、柴田ら (2014) が
述べているように、寒流系であった親潮の影響を受
けていると考えられる。

剥ぎ取り標本が採取された場所は、「津久井浜化
石層調査特集号」の写真に撮られた地域と同じであ
る。貝化石は表面がザラザラだったり、小さく割れ
ていたり風化が著しい。全体に、大きく 2 層順に
分かれ、貝殻層が見られる下位の層と、貝殻層が見
られない上位の層に分けられる。下位の層準には、
貝殻がコンベックス・アップの傾向にあり、また直
径 2～10 cm の礫が混ざり、比較的大きな貝が含ま
れる。上位の貝化石は、貝が割れている傾向がある。
内部の貝化石は、エゾマテガイ、イタヤガイ、トウ
キョウホタテなどが多く、その点は上位、下位とも
に変わらない。

記録者 樽 創

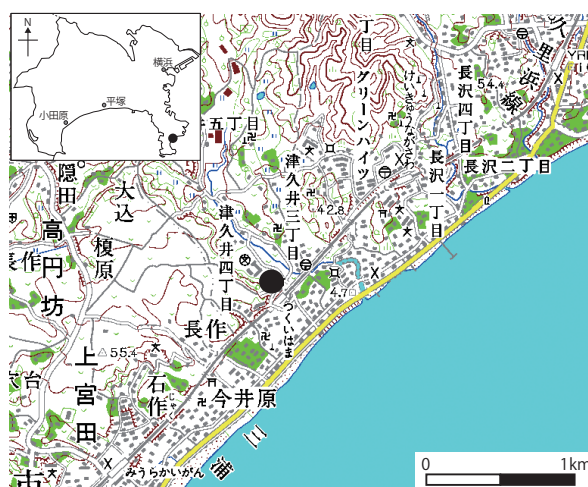


図 1c-7-1. 採集地点 (国土地理院発行の数値地図 50,000 (地図
画像)「埼玉・東京・神奈川」を使用)。



図 1c-7-2. 剥ぎ取り標本の採集の様子 (柴田健一郎氏撮影)。



図 Ic-7-3. 剥ぎ取り標本の写真,